



# 五月之部目録

△印ハ能智の  
季々持あへ

○養生の法○風雨の害○米の豊凶  
○妙茶其外人家重法の事ハ  
○数多ある故目録ハハある事

## 五月

卦 月支 調子  
巽 初丁  
巽 初丁  
巽 初丁

△芒種節 梅雨 五丁  
△夏至中 五丁

日令 此ハ五月日の定りし事  
起の事ありしことある事

△上茂足揃 五丁  
△松本祭 五丁

△秋菖蒲 五丁  
△菖蒲興 五丁

△菖蒲尊 五丁  
△内膳司供具 五丁

△五日節會 六丁  
△左近真手番 六丁

△騎射 馬弓 五丁  
△右近真手番 六丁

△端午節 端午 五丁  
△重午 五丁

△端午男女衣服 八丁  
△生花の式 六丁





五月 目錄

△菖蒲引 △永根 △菖蒲雙 五丁

△菖蒲紫 △菖蒲樹 △菖蒲花 △菖蒲帶 △菖蒲瓜

△菖蒲酒 十丁 △菖蒲湯 △菖蒲湯 十丁

△菖蒲胃 △削懸の甲 十丁

△穢 △やまろ甲 十丁 △印地打 十丁

△藥日 △製神 十丁 △藥玉 十丁

△長命縷 △結命縷 △避兵縷 △備懸 △五形玉

△藥草 十丁 △競射 十丁

△神水 十丁

△五月鏡 十丁 △角黍 十丁 △菰粽 △餉粽 △錐粽 △秤鏡粽 △飾粽 △菰粽 △九字粽 △芦粽

△柏餅 十丁 △射粉圓 十丁

△退水神 十丁 △桃印府 十丁

△文人 △蒲人 △戴笠鹿 △画天師 十丁

△去鴿 十丁 △鴿舌 十丁 △鼻美 十丁

△競渡 △鳥車 △水馬 △賀端午文 十丁

△茂競馬 △藤木祭 十丁

△生玉流鏑馬 十丁 △関明神祭 十丁

△六日菖蒲 十丁

△宇治祭 十丁 △植竹 十丁

△室祭 十丁 △今宮祭 十丁

△而社祭 十丁 △有無日 十丁

△虎涙雨 十丁 △住吉御田植 十丁

△山田御田植 十丁 △祇園に洗 十丁

△月令 此部は八日の定まりあり 五月は月のことあり

△最勝講 十丁 △賑給 十丁

△富士 十丁 △内宮外宮御田植 十丁

△瀑布 △麻布 △生布 △木平 △半まじ 十丁

日八廿 日三七 日八 日六



△半復生

△大原

△草

△繡

△草

△草

時令

此部より七月の時侯

△五月雨

△梅雨

△草

△五月雨

△白

△草

草木

此部より五月一ヶ月の草木のつゆあつむ

△檉花

△草

△山梔子花

△草

△柘榴花

△草

△繡樹

△草

△女貞

△草

△南天花

△草

△栗花

△草

△杜鵑花

△草

△要花

△草

△合歡花

△草

△柵花

△草

△百合花

△草

△車百合

△草

△姫百合

△草

△唐百合

△草

△唐百合

△草

△秋百合

△草

△鬼百合

△草

△系百合

△草

△紫陽花

△草

△紅花

△草

△天門冬花

△草

△蜀葵

△草

△錦葵

△草

△龍葵

△草

△萱草花

△草

△下毛花

△草

△金盞花

△草

△金錢花

△草

△金銀花

△草

△夏菊

△草

△荷香

△草

△時計草

△草

△威灵仙

△草

△屏李

△草

△美容柳

△草

△酢漿草花

△草

△蛇射子

△草

△蕺菜花

△草

△草

△草

△接莢花

△草

△天南星花

△草

△苔花

△草

△朝葉

△草



五月 目錄

△豌豆引 廿八丁 △蠶豆引 廿八丁

△花且見 廿八丁 △花葉蒲 廿八丁

△菖蒲 廿八丁 △長根草 廿九丁

朝露州 廿九丁 △帳釣草 廿九丁

△萍花 廿九丁 △藻花 廿九丁

△鐵線花 廿九丁 △撫子 廿九丁

△田直 廿九丁 △早乙女 廿九丁

△田歌 廿九丁 △田草取 廿九丁

△早苗 廿九丁 △菱花 廿九丁

若竹 廿九丁 竹品類 廿九丁

△艾刈 廿九丁 △真菰刈 廿九丁

△和布刈 廿九丁

△海帶刈 廿九丁 △李子 廿九丁

楊梅 廿九丁 氣條桃 廿九丁

無花菓 廿九丁 天仙菓 廿九丁

△枇杷 廿九丁 △青梅 廿九丁

△梅 廿九丁 △梅漬 廿九丁

△杏子 廿九丁 櫻桃 廿九丁

△桑実 廿九丁 △青小袖 廿九丁

薑 廿九丁 △生胡桃 廿九丁

△早松茸 廿九丁 △茄子 廿九丁

△新茄子 廿九丁 △瓜花 廿九丁

△早瓜 廿九丁 △胡瓜 廿九丁

△姬瓜 廿九丁 △蕨時 廿九丁

△釋時 廿九丁 △柰時 廿九丁

△胡麻時 廿九丁 種植 廿九丁



生類

此部は五月一ヶ月の生類のいさぎをあらわす

△獸狩

△鷹

△鹿子

△魚菜打

△水雞

△黒鴨

△永鳥巢

△諸鳥

△毛で替鷹

△鶯叔音

△鷓鴣初

△鶉の巢

△蛆

△初蟬

△小條

△響子

△水馬

△鼓虫

△蛇脱皮

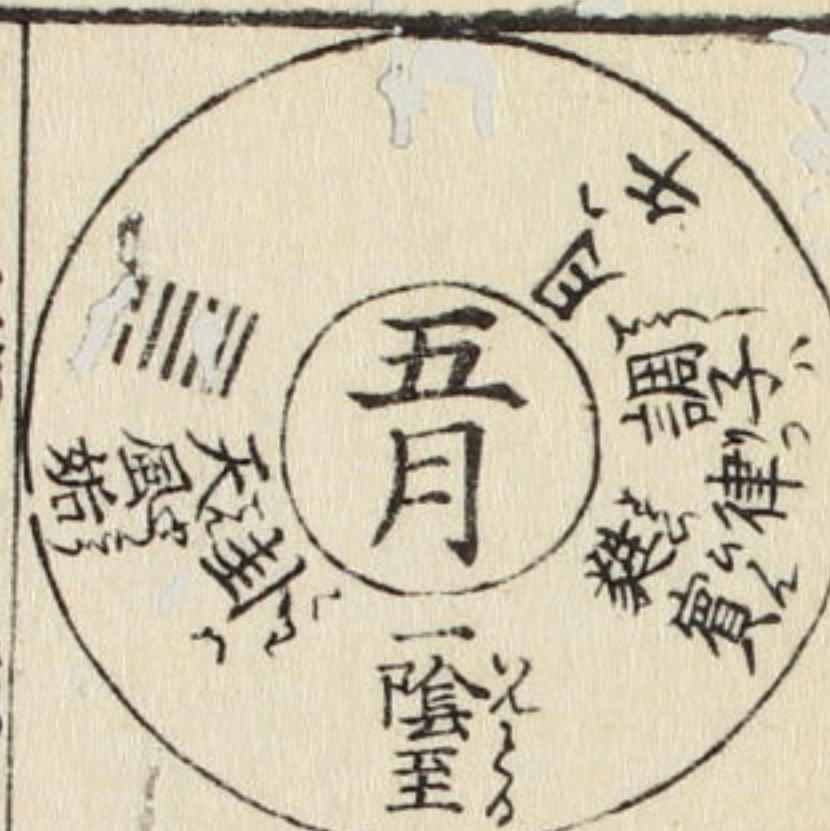
△蟻

△五月

此部は風雨の占。破軍の向方。日取の吉凶。他行の心得。作華のうゆ。料理。秘法。の法。食物の好悪等。の外。重法。の。品々。あり。尤。日の。定。り。たる。事。ハ。口。の。日。今。の。部。あり。爰。は。日。の。こ。こ。より。五月。一。ヶ月。の。西。女。用。の。事。あり。つ。む。

五月之部

△印ハ季を  
持ツリのあり



冬至は二陽  
生る如し  
夏至は又一  
陰生ると  
陽極つて  
陰生する

○天風始ハ女の莊んを封じ嫁  
よりし不貞のあらあり

異名

○仲夏  
○蒲月  
○夏

五△夏半

盛夏△蕤賓△五月

△早苗月

いつろ月△ひめのはる月

△たつこ月

莫傳 吹去月 藏玉

異名註

△仲夏ハ夏のかり  
△鶉月ハ月令ニ日

月令鶉首といふ故名づく鶉  
首ハ星の名あり。南訛書經



平秩南訛とあり夏時物のさかんなり變化と云ふこと

○蒲月 蒲の菖蒲の事○夏五夏のさかん△夏半是も夏の

さかん盛夏のさかの盛さかん△蕤賓蕤の下にして主く實客之

陽氣上へきさかんと陰氣主人とありて客と敬さかの義なり即ち

五月の律あり○早苗月の早苗とさかん月なれり○さかん

さかん月と畧さかんあり

⑤秘藏 さかん月 沁道ありはさかんはさかんめり高小かざつさかん月とて

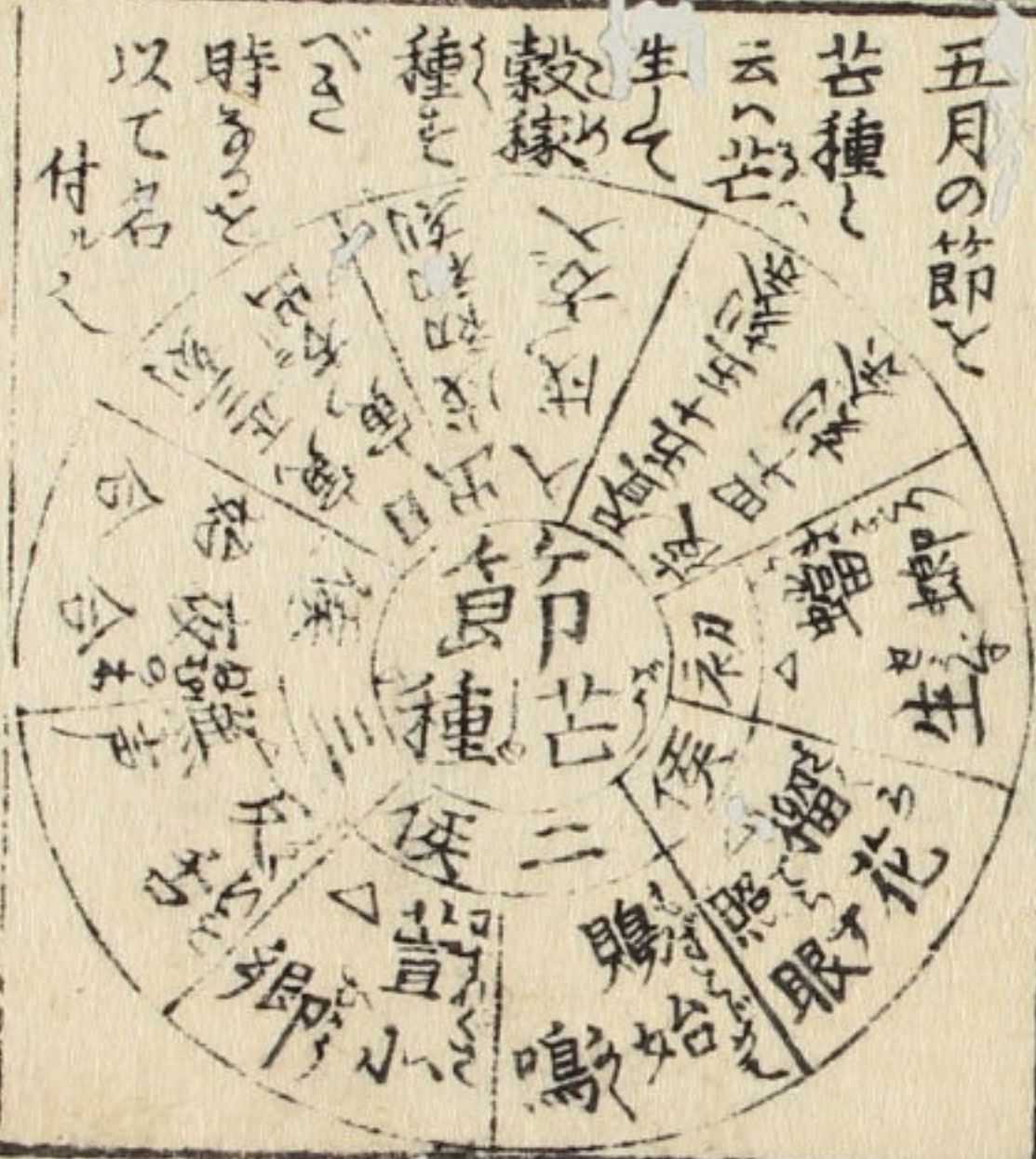
藏玉 さかん月 五月の晴ろもさかんめり月さかんといひさかん

全 たらされ月 さかん代より橋月の名なると

さかん代より橋月の名なると

節

△芒種七十二候。草木七十二候。昼夜長短。日の出入等を記す



○蟪蛄の氣の陰なり此月一陰下か生さかん微陰の氣

感して蟪蛄が生さかん此虫を物と云ふ時ありてありて

○鶉の陰類物を移さかん雲すさ鳥一陰の已が好氣の生

さかん感して鳴さかん反舌の鶯さかん是は春の陽氣を

悦んで来り鳴く一陰の氣とさかん音を入るなり



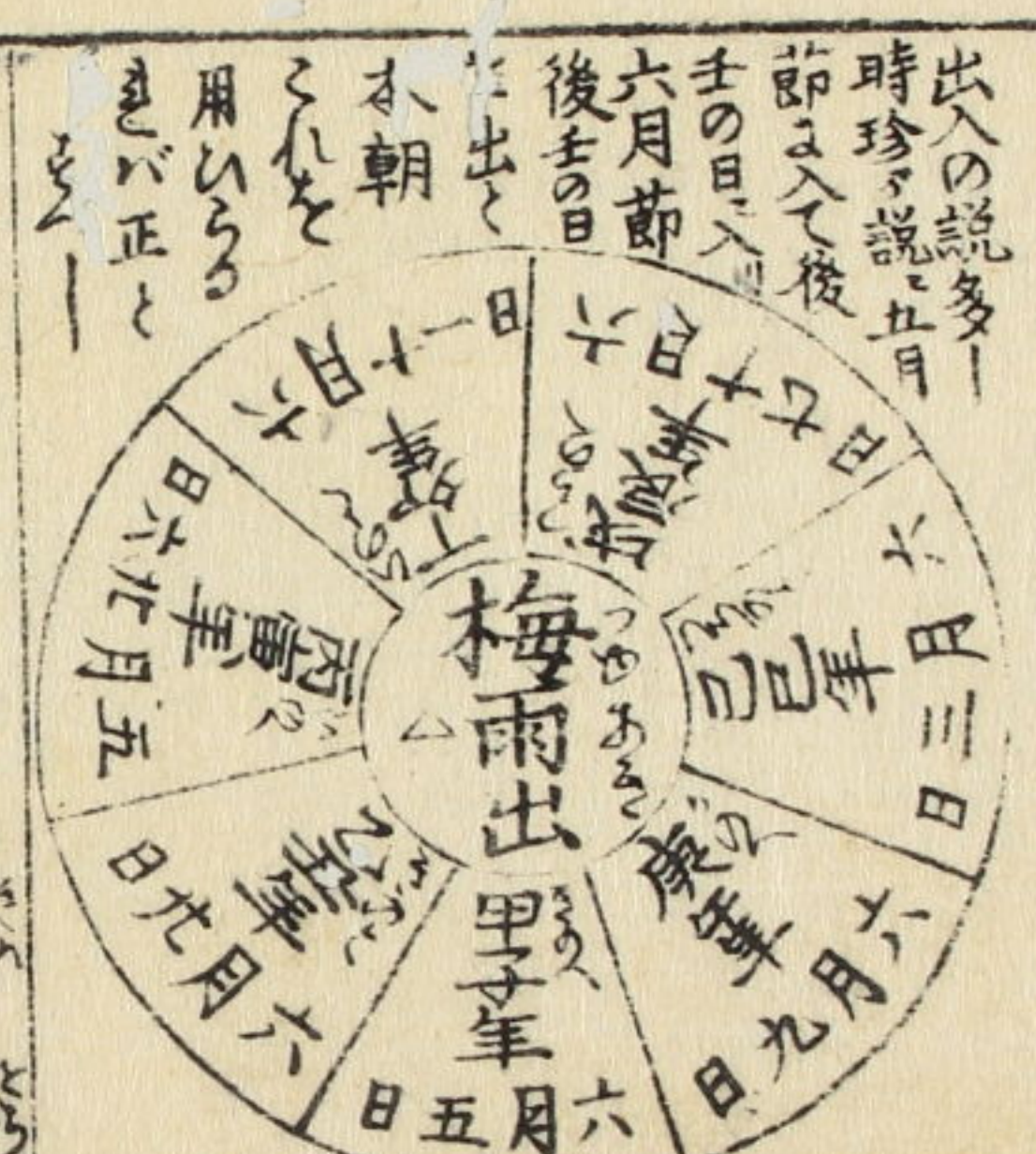
節台候 今日雷多し豊年  
より雨降る旱の

兆稀多く空の芒種の雨一  
すきば梅雨一尺に當るといふ

是をきまらふ此日雨多し  
多し旱の雨ありといふも多

かゞ日中小一丈の竿を立て  
影と測り四寸五分に成りす

梅雨出の説 次の丸の内記  
交年のほり出



按る五月梅まき黄と落  
んとす柘榴の花ひき栗の花

蔓の子らまきふ躍るの比  
長雨あり身を梅雨といふ雨

甚と多きすとつとむかひ  
石ぞ入あり物くいと生を雷鳴

を以て出梅とす○京師鳥丸中  
立賣下町のおまき又大徳寺

門前の人家のけしき并は梅  
雨の穴あり其時は至る水はた

つる晴んとすれい水うり  
州丹生の山田栗花落理左衛門

宅は井あり徑三尺深サ一尺梅  
雨は入て水はく出梅の比水は

梅天氣 海雨は多く西風南  
風より山の端は雲

多く風は時わらうと風るは  
空は雲多く天氣くくると

より出を是とすらるといふ此  
雨の内朝東風二三日は

吹は空も白くする是を船舞風  
といふ雨くくく○雨あんとて



く雷鳴くを頃と守然  
く梅雨の内は雷ゆなく  
鳴く洪水と主は夜鳴り或は沖へ  
入り入り入りて宜くは

新題林 重條

雨ふきき、梅もめりし

連句素、ふあは梅の両昌休

花のさきさきと梅の両細巴

詞、白くく黒くく、くくく

かびるる。おゆるた

能言蒲劔もさるの梅家貞能

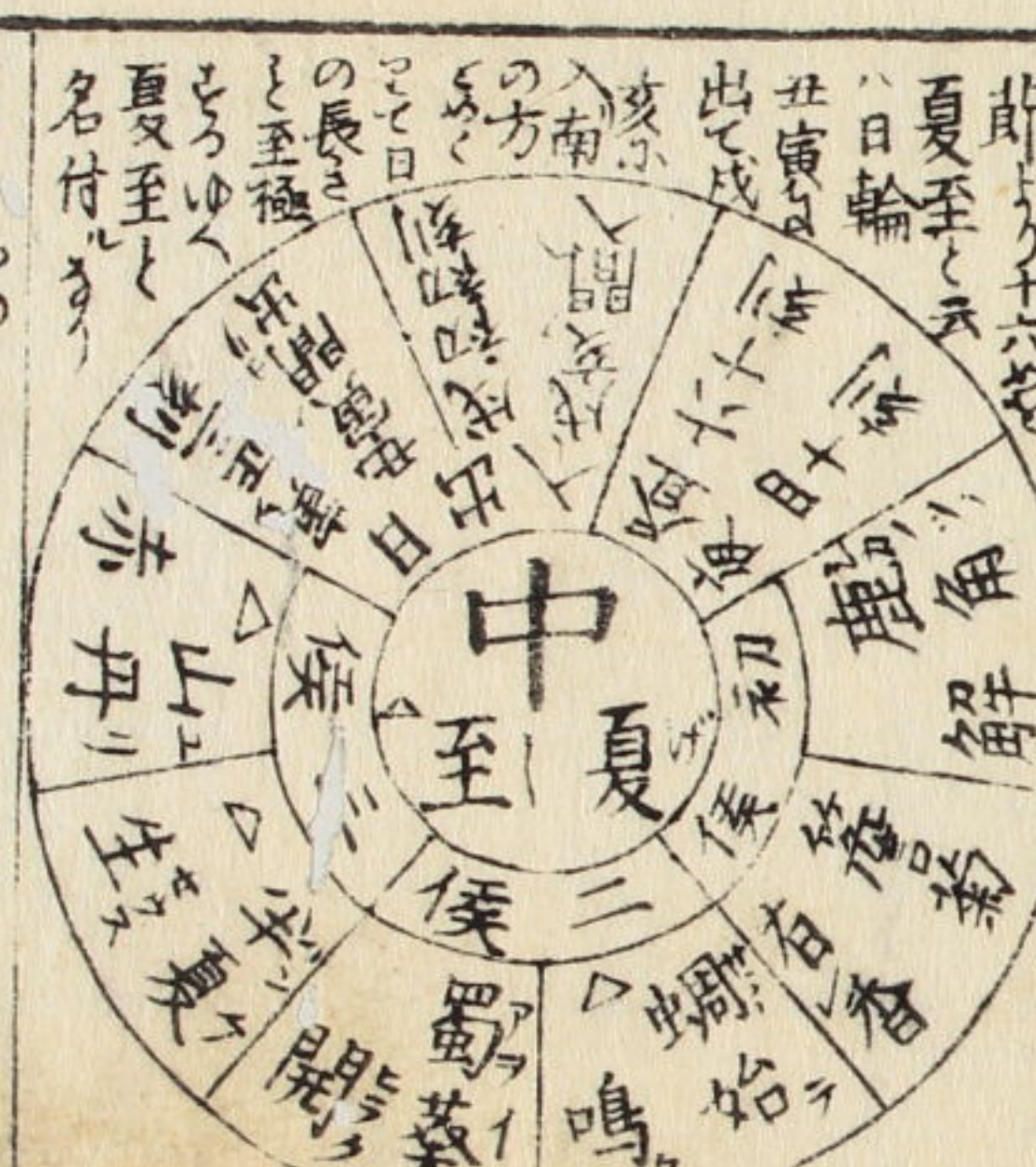
妙梅雨水 壺に入貯へ置べり  
茶と煎すれば甚美

癩疥と洗へ其痕うつる  
将香油と造まば熟し其外  
衣を洗ふは用まば灰汁ゆじ  
さるまじも此水久く貯へば  
○はのまかびるるを去るはひらと  
を用ひ頻く即ち落るる

梅養生 梅雨中の湿を幾  
散らるる蒼木と

火は焼て煙とくぐり雨湿を  
病と生むるくさる

中 △夏至七十二候。草木七十二候  
○昼夜長短。日の出入等左記



鹿の角いま三ツあり左右含  
せて六ツあり十月は一陽生

此月して六陽終り一陰生るる  
氣の感して角と落る鹿の

六月めて生るるのく



ハセシヨリ其声を聞く小人の心とをぬくむる陰虫あり  
 微陰は感じて鳴る△蟬の初声ももつゝ○半夏の暦の時候  
 小も△半夏生とあつて種物とくふるまはる古代より此前後を以てうゆつ物多し其時をちぐんど生る草あり

夏至天氣占候 夏至の日

西南の風あり六月の洪水あり  
 ○晴天をまは六月暑氣つゞく  
 旱く○北風吹ハ水さうりめで  
 夏中夕立多く米穀ゆくく  
 ○夏至中旬小あまは豊年あり  
 下旬小あまは米價貴し○當日  
 雨ふらぬ淋時とつ久雨と主る  
 去るうらむも小雨の宜しとす  
 ○黒雲多し水難くす○日小  
 暈あまは洪水あり○雷鳴ハ

六月ひびく甚し○午の時南方小赤雲あり五穀大ふまふる赤雲なく日月小光さくは五穀ふれど人病多し



夏至養生 夏至の當日井とく

水を改まは瘧疫と病む○夏至の日夫婦の交りそまふと狐忌む千金方又出する○  
 月令に此日葚ふく其外をきりのを食せど淫欲を犯す  
 危くはつる今日日の長き事極る陰陽争天地死生かてり男



子齋戒、色と歩騷事、心氣と定め保養、さびさび日あり

日令

此部は五月、月日の定、事支の定、方事と記と

湖 天氣

今日晴天、五穀、よわびの雨、大風、早、米價貴、北風、猶、悪、東風、半日吹、終、養生、日吹、米の價貴、老い、無病、京、上賀茂、近江、松本、南都、眉、寺聖武帝三、尊像開帳日、天氣、今日晴、篠あり、南、草蒲、今日内裏へ、奉ふとさる

養生 今日晴 五穀 米價貴 北風 猶 悪 東風 半日吹 終 養生 日吹 米の價貴 老い 無病 京 上賀茂 近江 松本 南都 眉 寺聖武帝三 尊像開帳日 天氣 今日晴 篠あり 南 草蒲 今日内裏へ 奉ふとさる

養生 今日晴 五穀 米價貴 北風 猶 悪 東風 半日吹 終 養生 日吹 米の價貴 老い 無病 京 上賀茂 近江 松本 南都 眉 寺聖武帝三 尊像開帳日 天氣 今日晴 篠あり 南 草蒲 今日内裏へ 奉ふとさる

養生 今日晴 五穀 米價貴 北風 猶 悪 東風 半日吹 終 養生 日吹 米の價貴 老い 無病 京 上賀茂 近江 松本 南都 眉 寺聖武帝三 尊像開帳日 天氣 今日晴 篠あり 南 草蒲 今日内裏へ 奉ふとさる

養生 今日晴 五穀 米價貴 北風 猶 悪 東風 半日吹 終 養生 日吹 米の價貴 老い 無病 京 上賀茂 近江 松本 南都 眉 寺聖武帝三 尊像開帳日 天氣 今日晴 篠あり 南 草蒲 今日内裏へ 奉ふとさる

養生 今日晴 五穀 米價貴 北風 猶 悪 東風 半日吹 終 養生 日吹 米の價貴 老い 無病 京 上賀茂 近江 松本 南都 眉 寺聖武帝三 尊像開帳日 天氣 今日晴 篠あり 南 草蒲 今日内裏へ 奉ふとさる

養生 今日晴 五穀 米價貴 北風 猶 悪 東風 半日吹 終 養生 日吹 米の價貴 老い 無病 京 上賀茂 近江 松本 南都 眉 寺聖武帝三 尊像開帳日 天氣 今日晴 篠あり 南 草蒲 今日内裏へ 奉ふとさる

養生 今日晴 五穀 米價貴 北風 猶 悪 東風 半日吹 終 養生 日吹 米の價貴 老い 無病 京 上賀茂 近江 松本 南都 眉 寺聖武帝三 尊像開帳日 天氣 今日晴 篠あり 南 草蒲 今日内裏へ 奉ふとさる

養生 今日晴 五穀 米價貴 北風 猶 悪 東風 半日吹 終 養生 日吹 米の價貴 老い 無病 京 上賀茂 近江 松本 南都 眉 寺聖武帝三 尊像開帳日 天氣 今日晴 篠あり 南 草蒲 今日内裏へ 奉ふとさる

草蒲輿

左右の近衛兵衛の六府あり

免の輿と南殿の階に東西は立又時の花をかりそ

かまゝ京 高雄虫千三 日より九日を

四 草蒲葺

あやめ屋根の軒置とさる

今日とあやめみそを

此頃を盛夏より毒虫多く生をふより軒は草蒲ををかきりまると虫の入りぬまどあいかり

是もあや 江戸 三の輪

棟莖 俗ふせんえ 内膳司

王葉集 公雄

あやめ



供早瓜 山城の御園より

五不成 天氣 本朝米賈の

日就日 諺小四イケニ

五が五とつとあり四月三日

と今日との晴と以て豊凶と

定め價の高下とを晴と

豊年曇を凶年とす

五日節會 天子武徳殿より出

と行つれ群臣酒を賜ふ

人々皆あやめのうづとかく

ふ典葉頭はくえと奉る事

るありと公事根元よ出

左近真手番 左近乃馬

と事する右近の馬場小

てい六日と是といとりの日と

り今日近衛の隨身禡の尻

と引折てきるゆふひをりの

日といふ左近のあり手番の五月

三日右近の六日あり能人の受の

かうまじたり 騎射 馬引

くへる山川 五月五日

豊楽院にて昔ハ弓と御覧せ

とあり是を馬弓といふ

日就日 天氣 本朝米賈の

諺小四イケニ

五の始る日い今月の五は始

端といはれどもちを訓ず

或い五月五日少重五といふ

午は月をいふ端午とも書

一説に午いふは乃五の字

と通用ともいふ

五日異名 重午 重五

端午 端五 端陽

地臘 蒲節 解粽

天中 艾節 朱符

行中 行中 行中

行中 行中 行中

行中 行中 行中

行中 行中 行中

行中 行中 行中

行中 行中 行中

行中 行中 行中

行中 行中 行中

行中 行中 行中

行中 行中 行中

行中 行中 行中



異名註

重午午の月昔の  
午の日を用ひされ

かきまはるむまかり△重五  
ハ五月五日あるれがかり鮮粽

節ハちまをとく也あり

端陽ハ正陽の同し。地臘ハ

一陰生じるとき其外の異名

文字のトマシハありてさるる

艾節ハ世日達きて作る虎を門子掛

けく邪氣を拂ふ也ハ

端午衣服 今日より帷子を着  
袴をき色又浅黄

女衣服

女もひとへのも  
イカヒビ

上着ハ色筋のありせういさ  
あそびの色の筋をうけるを

めもよと節句の花あやめのも  
やうなり或ハむすたいらる

生花之式正

菖蒲 花菖蒲  
石竹 蓬

菖蒲引

菖蒲引  
新勅 前関自

深さぬはきふあうりあやめ  
年の終るるを区はひく

夫木 寄菖蒲祝 為相

君代ハあやめをさるるけの  
さるるけあやめをさるるけを

夫木 江中菖蒲 仲正

あやめまはるるやあつはあうり  
くさるるの心をさるるけを

詞 世沢のあふれおまてひく  
あまこふらるる多ふあは  
あまこふらるる多ふあは

詩 菖蒲五字對句

揮鎌若轉月

緑成玉床蓆

拂水生蓮珠

顔兼清夜娛

永根

哥はあやめはさるる根  
ととむるる永承六年



五月五日ふあめめの根合といふ

くありしより著問集又出さう  
△夫長と根のたははりいかなる  
々々やあまのひさるるん俊頼

△**菖蒲髪** 聖武帝の時又初  
続日本紀又出さう

△**菖蒲案** 菖蒲生荒を黒米  
の案にて奉るさう

△**菖蒲枕** 夫木 俊頼  
底はうへあやめの

はくくかききとれそ  
△**菖蒲**

△**帷子** △菖蒲浴衣  
△**帷子** △菖蒲浴衣  
△**帷子** △菖蒲浴衣

△**菖蒲帯** 棟佩  
△**菖蒲** 棟を

とて帯物とすること悪氣と  
辟るくと證類本艸出づ俗云

せんどの木といふものなり  
△**棟佩** ていつかてやあまの者嵐雪

△**菖蒲酒** 石菖と切て酒ふ  
なして是とのし雄

黄を少くをうりてまじく  
より一切の邪氣をささる

△**菖蒲酒** 家定  
△**蘭湯** 蘭

湯は入てゆあとする  
大戴礼に見へり

△**菖蒲湯** 百節の菖蒲の病と  
治とるふらう蘭湯を

△**菖蒲湯** 治とるふらう蘭湯を  
△**菖蒲湯** 治とるふらう蘭湯を

△**菖蒲刀** いあへ菖蒲と  
りてかざる今木

△**菖蒲刀** いあへ菖蒲と  
りてかざる今木

△**菖蒲刀** いあへ菖蒲と  
りてかざる今木

△**菖蒲刀** いあへ菖蒲と  
りてかざる今木

△**菖蒲刀** いあへ菖蒲と  
りてかざる今木



賊来る早良親王討手とて出陣あり親王伏見ららの森社に祈る時ふ五月五日忽ち風吹て戦へどと勝事を得たり此例ふらるる唐ふも今日武事とらるる戯事をと事類書纂要に出る自然は此月武備とせし和漢符合せしるるへ

非 疮瘡の治とらるる幟各其角  
 女の子のひらくつりのりり律人  
 狂 忍を海生いやふふあ光ふ  
 綱もよとらるる紙の厚なる 紅雪

印地打 童子の小弓と持て戯  
 とらるる幸騎射とらるる

印地とらるる跡の地付て  
 印地とらるる名付るる  
 非 忍ふふあ地のをつて嵐雪  
 移竹

薬日 新撰六帖 貫之  
 内多さくたさうすあや  
 免茶後そとらるる日はあらしけり

○今日と茶日といふ茶草と取  
 或へ九散と調合とらるる中  
 も今日制とらるる茶を記す

紫金錠 諸毒を解腫物と  
 消し毒虫ととらるる神方なり  
 五倍子 廿目 大戟 十五 續斷子 十枚  
 麝香 五枚 右細末して丸じ其外

豊心丹 固本丹 延齡丹 反魂丹等  
 とらるる今日調合とらるる  
 或へ神麴 今日製と  
 薬玉 明日もとらるる

分 夫木 中宮上総  
 あふととらるるたあふあふあ  
 くらりのあふととらるるあふあ  
 ○今日茶草と五色の糸ととらるる  
 の人臂ふかくと悪氣を拂ふ  
 とらるるあふととらるるあふと

とらるるあふととらるるあふと



長命縷長命の縷續命縷續命の縷辟兵縷辟兵の縷風俗通條達風俗通條達記

皆茶玉の事皆茶玉の事五月五月正立正立

詩 續命縷之詞 萬楚

西施西施漫道漫道浣春紗浣春紗美人美人ナリ

浣紗石浣紗石八八碧玉碧玉今時今時闕麗華闕麗華

故事故事ナリ 碧玉碧玉モ春秋ノ時ノ美婦モ春秋ノ時ノ美婦之眉黛之眉黛

器量器量ヲクアラバアラソフ 奪將奪將萱州萱州色色ナルナル八草八草ノ誓ノ誓丸丸

ヨリハ色ヨリハ色紅裙紅裙妬殺妬殺石榴花石榴花

モスツノ紅モスツノ紅イナルハ花イナルハ花ノウルハシク見事見事ナルヲ子子タムバカリナリ

新歌新歌一曲一曲令人令人豔豔タハハメ

ツラシク人々ツラシク人々ノ心モ醉舞醉舞雙眸雙眸

ウキタツバカリナリ 斂髻斂髻斜斜酒ニ酔テ舞ノ袖酒ニ酔テ舞ノ袖ヲカ

タリ 誰道誰道五絲五絲能續命能續命カ

シカラ五絲シカラ五絲續命ノ故事續命ノ故事ヲイヒツタヘレコノ妓コノ妓ガヲ見テ却令却令今日今日灰灰君家君家ニ其美其美廉廉

イヲ失ヒ死セント思フバカリナリ

藥草摘藥草摘今日今日収採収採を日

て製て製競射競射是も百草是も百草を以て

馳馳競射競射茶獵茶獵と云

月月ふるるとり 鬪百草鬪百草色

の草の草とト也合せて勝負勝負を争ふた

神水神水今日今日午の時午の時雨ふる急

病病を治と或ハ丸茶丸茶を製すべし

五月鏡五月鏡玉葉玉葉為家



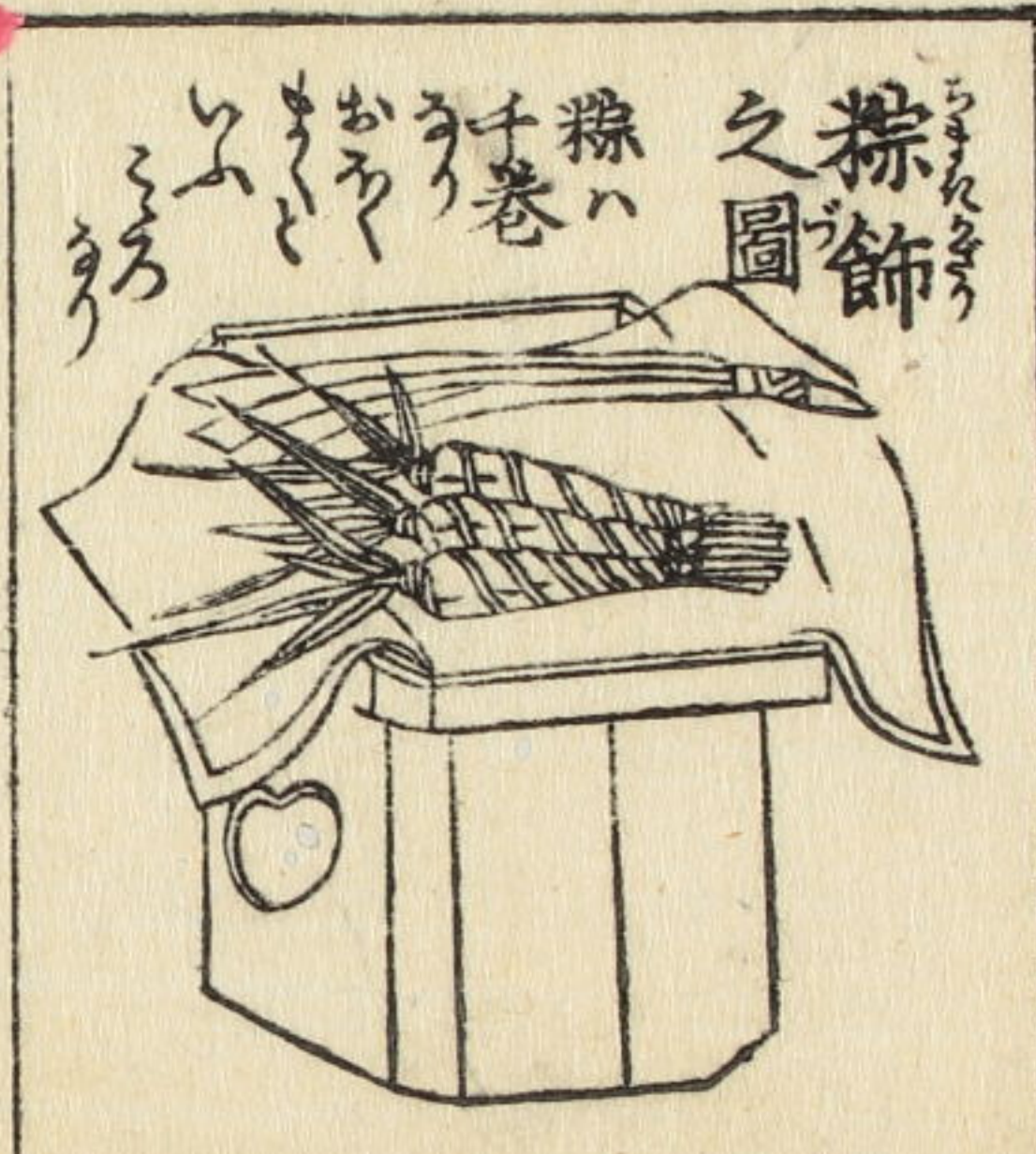
浪の身を鏡々下ろし 百練

鑑 今日午の時楊子工まこ銅  
を百さびさし明鏡を

鑄るにこと事文類聚も出づ  
是を以て本朝哥ふも詠する

粽 異名 角粽 鉤粽 秤錘粽  
交粽 九子粽 角粽

蘆粽 笹粽 飴粽  
飾粽 菰粽 合茶を粽伊勢出



粽餅 ひりあらの葉に  
はりり 拍も神道

不用ゆめをそらひのるれば  
ゆらゆるなる屋しとくべき

今日のかざり月の毒邪を拂ふ  
ため夏ハ毒虫多く人の家小

も入り来るにより粽の蛇の形小  
表を是と食すは彼を降伏

する心して夏の中口さしいふ  
きこと表して祝さるるべし

俳意をぬ女は粽を言ふに鬼貫  
まはすやつまをまのむび粽 其角

狂者よふさるれよいふ命の  
救も八子夜も粽をば 行安

詩 粽之詞 唐順之

南薰應律轉宋旗 五月八午  
方ラ主ル 火帝衆離錦席披

色赤シ 夏ハ火應レテ神  
ニテハ離卦ニアタリテノ澤ニ坐

席ヲ 榴吐千花承羽蓋  
カサニ映メ美シ 賞開五葉拂

口ノ花ノ紅キヌ 賞開五葉拂



瑤墀ヨウヂ 堯ノ時冀英アリ一月二

瑤墀ハタニシクニワ 承盤セウパン 錯出サツシュツ

仙人セニシ 掌テ 天ノ甘アミ 雷カミナリ 承盛セウセイ 器キ 之ノ

織女オリメ 絲イト 故事コト 用ヨウ 復道フクドウ 龍舟リウシュウ

方競渡カタキナヒ 改日カシツ 蛟龍カウリウ 舟フネ ヲサヘ

街恩マエニ 更許マシヨク 向昆池コウコンチ 天子テンシ ノ恩オン

ヲユテ御池ミツ 二舟ニフネ ヲ浮ウケル ヘル

蛟食カウシ 芳辰ホウチン 屈クハ 原ハラ 今日コンニチ 泪ナミダ

人ヒト これを祭マツル 其祭供マツルカヒ を蛟龍カウリウ の

五色イロイロ の糸イト と以モツテ 芥カイ はけハケ こそ

の始ハジメ 之ノ 委オモ 一ヒト 本ホン 篇ペン

博物ブツツ 全ゼン 見ミ へル 射イハ 粉コ

團ダン 港粉團カウコ 水團スイダン 白團ハクダン 唐カラ の

是コト と射イハ むツ 食クハ むツ 事コト 天寶テンホウ

貴事キジ 退水タイスイ 神カミ 唐カラ 士シ 高タカ 辛シ

小沉コシヅム 其ソノ 冥ミヤウ 水神スイカミ とシ りテ 人ヒト を

蛇ヘビ とシ るコト 水神スイカミ 小コ 人ヒト を

桃印トウイン 符フ 今イマ 日ニチ の符フ と

術ジュツ 赤靈セクリウ 符フ 今日コンニチ の符フ と

呪ノロ 艾人アイジン 痛イタ 多タ 小コ 人ヒト

形カタ 鹿カ の形カタ とシ 門カド の

浦ウラ 人ヒト もシ 小コ 人ヒト

今イマ 日ニチ の符フ と

痛イタ 多タ 小コ 人ヒト

形カタ 鹿カ の形カタ とシ 門カド の

浦ウラ 人ヒト もシ 小コ 人ヒト



戴艾虎 唐土の艾虎を虎

る小虎を色々に染めて作り

艾の葉をつけつけのりをつけて

邪氣をこころす 画天師 張天師

の像を

画にかき又至るを作て 去

毒氣をこころすといふ本朝

元三大師の御影をこころす 去

鴿舌 零陵記に鴿舌

舌の尖を舌れがうく物ついで

あまをうるると 梟 美

けりあがりものと百官 立競

賜へし漢書み出たり

渡 舟車永馬屈原海羅

あまを失ぬこれをすくふ

心して今日競渡のたつまを

るを船のかるく早と

水馬ともいふ越人船を

車といひ楫を馬といふ

状 賀端午文 左の尺牘

即漢文

端午之 祝規

目初度 を

堪 スルニ

飛 スルニ

不 スルニ

楚 スルニ

敢 スルニ

以 スルニ

留 スルニ



尺牘 上中下各替

午日祝規 ①天中佳節 ②端

午之定秩 ③五綵 ④節浴蘭

節正屆 ⑤堪勸賞 ⑥多壽万

福 ⑦壽詞何盡 ⑧更欣躍 ⑨

多快欣々多々 ⑩更不顧不勝

⑪不憚輕儀 ⑫不羞菲薄 ⑬

無論鄙品 ⑭薄絺 ⑮輕帷單衣

楚粽 ⑯角粽 ⑰黍粽 ⑱菰葉粽 ⑲從

例 ⑳謹因舊規 ㉑以奉獻 ㉒

逐儀例 ㉓獻納 ㉔菲儀以投

希笑云々 ㉕冀笑存鑒 ㉖我背

曝 ㉗惟鑒納為幸 ㉘請願

留

狀 同報答 左リハ尺牘 漢文ナリ

涉彼時更時年々為佳者

屢使傳薄節之吉辰

足事之由者一打俾其方

送鮮美嘉魚 以テ

結接水境人形多懸法云

錦堯莊廉偶人與豎童

少懸情之候亦亦之受納

蒙 箇厚 賜 訖

仕以程約之教之礼了述人

拜謝期 多日

尺牘 上中下各替

辱使來使傳命 ①勞貴介

蒙使命 ②恭承顧命 ③傳蒲

節云 ④賀端陽之辰 ⑤祝



綵縷佳節 ① 嵩令辰 ② 選鮮

美云 ③ 錦鱗下賜 ④ 珍魚

芳惠 ⑤ 惠嘉魚 錦兜在麗

⑥ 玉飾奇偶 ⑦ 綺羅金人

與豎童附小子 ⑧ 授豚兒

蒙簡厚貺 辱賜數品 更授

多儀 叨蒙分惠 拜謝云々

對使拜喜相逢 以謝之 拜

受無顏 暫待異日

妙治眼病 絳の袋 柘榴の

術花を盛て 今日眼を洗ひその

まゝ是を棄るゝとくゝゝ小汝我

病を代まゝとく 唱へ 治とる事

妙多りと養生雜記又とるせり

治淋病 首蒲根を取細末して

たゝるゝ置阿膠と等分合して

用也兩三度用いて治まゝ 治久痢

今日鯉の枕骨を黒焼あてたゝ

るゝ置くべ久く止りサひる

痢病を治すて其効神のおゝ

不病痢病 今日へいんちごを取り

朝露をめて置一ツ水とて吞ばその

年痢病のやを流行てもうつゝ

ぬくと妙く 衣服虫をぬる法 今

日苜の葉ととく 櫃箱の中へ

入置バホのづくり虫を生せざる

蠅のつらさる呪 白蜜のつらさる

蠅ふのさるさぬめでさるゝこそ

とれとつゝ此哥と三返唱へ白乃

字と四方の柱を逆さぬ張リ又

岡とつゝ字と棟とて天井とて

も真中にとく 但しつゝも文

字とかく紙一寸四方真四角と切

てかくべ 今日午の刻ふ此法

小蠅のいん

辟發術 今日午の

刻石曹と採て晒し乾し末と



蒲の下へ放置けが登長くこま  
す蚊と辟る咒 今日午刻儀方

の二字と書て家内の柱やひし  
まに粘り蚊をさら又酒と篠の  
葉にそぎて座の四方の隅に挿  
せば蚊も其條はすかりとるる

又法 今日午刻燈心を油の内へ  
浸し日輪をひらいて天上の金雞

蚊子脚髓の液を喫ると右の咒  
文を七返唱へ念一終りて太陽の

氣を吸て燈心の上は息を吹こ  
夜分この燈心は火を点とれば蚊

とくを去る 又法 今日浮萍を  
とり陰乾めて細末を樟腦を

加へて拌せ彈子の大小を丸めて  
每晚の蚊を火とて林へ家内

の蚊とくを水とる 物覚るま  
人ふ物忘れことある法 今日龍の爪

を衣服の領の中へ入置て物忘れ  
やむ夫婦中惡こと相順ふす術

今日鳴鳩の足は骨ととりて絳の  
袋へ入男の左の手女の右の手はけ

置べし又常々 京賀茂競馬  
袂へ入るとは

ひ馬。赤方黒方として左右を  
うけて馬をうけてるなり

非けるる人やあかひる上貴  
狂一さふかあなるうへる

まくさもあるは令儀足負柳  
△藤井森祭。馬あり此祭の古

実ハ鐵甲の下 大坂 生玉や三馬  
記と

堂法事 大和祭 天神 近江 関  
日の刻 音集

神祭○三井寺南院祭神輿出御  
○大津高山寺貴船祭

六日 六日 菅浦 夫木 衣世丙大臣  
いふせん今六日の

あやめまむく人もさかぬ  
非六日六日の初は入菅浦小悟文



七 京 今宮祭 八 山城 宇治祭

申 陸奥 相馬中村野 不成 三日 就日

栽竹 龍生の節又竹醉日 竹迷日

播磨 室明 五十 京 今宮祭 茶野

不動地主早尾 和泉 堺天 京 神祭

大権現神事 永觀堂大般若轉讀 大坂 天

寺大般 丹後 九世戸の 七 大 龍燈 正五 九月

坂 天王寺金堂 八 京 今宮御 興洗

上御靈 廿 不成 大坂 天王 寺太

大般若 日 就日 日 二 廿 大坂 寺太

子堂法事 三 京 清水田村 近 管忌

音樂午刻 日 有無日 村上 天皇

江 坂本兩 社祭 日 五 有無日 村上 天皇

の御國忌之依て今日禁裏小 政事

りくゆへ 江戸 揚弓結 虎 界惣會日

淚雨 今日曾我祐成討 日 其妻虎愁傷世

排 中 今日雨を虎が涙 云々

狂 秋 の別とてあびさる 虎

日 本 虎の毛を毛に 示得

京 下京中道寺祭 江戸 芝居 曾我

祭 江戸初芝居 曾我 物語をよみ此報恩 今日法



樂の哥舞妓とてさうらうの白銀  
路鳥は森神明祭。目黒不動

泰の薬研 大坂 住吉御田  
植今日堺

乳守の遊女御田とてゆふ事む  
く宮女悪瘡の愁ありて官中

と出て乳守にさふまひ此病と住  
吉の神といのちあるあつさ神託

とて諸人又面とさしさいやま  
さばるまふとてさよめてまのの

女まふとてり田をさうへたり悪  
瘡たらしめりいふとてこの例を以

てそれより乳守の遊女も田植女  
とてさるのさよめとてさるわくと

⑤夫本 住吉社苗 家隆  
の苗とてさるのさよめとてさる

社とてさるのさよめとてさるわくと  
排々の佩へ田うのさや神を采山

神とてさるのさよめとてさるわくと  
ふし女のさよめとてさるわくと

### 伊勢

山田御田扇。宮司より  
扇を出してさつる事と

常の扇よりい火一丈さへ内宮の  
扇の骨七本外宮の扇の骨六

本槍とてつる松の画とてい惠  
比須の朔とつる上り墨繪の板

行ある藤々いさ物とて社人あ  
すこ此扇を持て舞うとてい

御師より遠近の諸邸家へ送  
らる恒例ありこのあまの凡

あたまの邪氣と除き田圃と作  
る者能あつて凶年とてい

晦京 祇園神輿洗。こいひと  
こ一基四条官川のちと

アんのさう水とてさきや長とて  
あーあーいといふその義式を

の役者おのが家々の挑灯を  
とがさせてさうと守護し奉る

いゝ鳥ある見物 和泉 堺方違  
てらんしあさる 明神祭



月令 此部は五月一ヶ月日の定くする事である

最勝講 東大寺。真福寺。延曆寺。園城寺の僧と講師して清涼殿講を講ず

年中行司 内大臣

百重や五月の口は...

草小御講の賑給

年中行司 嗣長朝臣

何れは民のまゝ...

富士垢離 来月上旬より七月に至るまで

登山と九百日浴水潔齋...

伊勢 内宮外宮御田植のたまらざる大神事

て長官車をいざー 瀑布 規式をまゝ多し

生布 △半きじ △木平 △麻布 △布きじ

雑布 △雑布 △雑布 △雑布

晒賣 打々曝布賣風至

半夏生 五月中より十一日めき

半夏生 五月十日より十一日めき

大原 丹波國大原の社へ

三月参詣とて春さし

九月参詣とて秋さし

絁 薄物 花 古代帷子



の 漆色シキといふ寛正六年慈照院殿大追物御見物の時射手の袋束フクロより花の白帷シロタビを着るは是を以て考まは漆色シキと定む其外は漆色

狂キヤウをまててさう帷子タビはあさひいろとてさういふ久清

非ヒ半ハまマくク笠カサはハ單羽織ヒツバオリ織オリ

非ヒのノぢヂうウうウ風カゼとトあアまマきキやヤ高タカ羽織ハネオリ玉タマ芝シバのノあアふフうウむム一ヒトまマねネ織オリもモ浮ウキせセ其ソノ角ツノ

時令 此部より五月の時候はかろ事とあつむ

五月雨 五月雨 梅雨 黄梅雨 霪雨 五月雨 五月雨 五月雨

クダルの畧リヤクをり△さつ△雨△な△ぞとてそれやらぬりのしり

新喜 藤原定家朝臣 玉祥の乃杉人のころつあまをふへてやどらる五月雨のを

家集 河五月雨 信実

五月雨ふつそらち川をさきそいあたらやうこぞくのむりま

家集 山家五月雨 雅有 あいさふを杉のしれ竹枝とて

續古 海辺五月雨 家隆 中くふ塩汲ぬゆ海士人の

千載 仲綱 神やなまらんさみくまはれ後

御集 江五月雨 後亮内大臣 五月雨もくくあうぬ位の江の

夫木 五月雨有餘 右衛門 五月雨のまきさうとれおらう

詞 日教あるきさ月日とさふさふ

五月雨のまきさうとれおらう

五月雨のまきさうとれおらう

五月雨のまきさうとれおらう

五月雨のまきさうとれおらう







詞 かわつよふとをり。家の外面  
 小舟のうらふし。紫雲ふまぐん  
 吹風おさる。うらふしのふらふら  
 夕のあけ。まよふ。小舟。河を。夕  
 月影。忘れぬ。まよふ。まよふ。  
 加茂。小舟。

山梔子花



木丹 越桃

詞 いそぐま。あふれい。まのり  
 連 ろらまのたれぬのあふれい  
 狂 はくくくくくくくくくくくく  
 の深飯光廣輝 石榴花 吉来  
 石榴三種あり本紅千葉白千葉  
 黄色千葉かり近世桃色あり  
 かりて珍らしく愛をこへ  
 新撰六帖

夏山の山松栞咲や峰越しよ  
 若きものさるいそい待りて

非 実花のぬえやまの花極如賀  
 詩 栞栞五字對句 同上

新枝含淺緑 露色珠簾映  
 脱萼散輕紅 香風粉壁遮

詩 栞栞七字對句 詩礎

風枝舞腰香不盡 不及春  
 露銷粧臉淚初乾 落絳英

眉黛棄將萱艸色 度隙風  
 紅裙妬殺石榴花 春閨空

詩 栞栞之詞 白樂天

暉々復煌々花中無此芳  
 くらキラくト見コトニサク此花ニ







秋といへるる花ありぬれぬ花あり

神々まてふ月... 非花... 今世の世

色々説あり○三才圖會小の柳を

坂樹とかく花の白く少なき百合

彌瞿。重箱。夫木。西行

詞夏の野。庭の面。あけこふ

連は... 車百合

日光の産い黄いろ。姫百

大峯より出る... 合

山丹。百合より似て

葉へ柳小似... 夫木

度の面れ去... 土御門院

狂深草小... 児山丹

小中... 唐山丹

開花小... 袂山丹

赤花びら... 鬼百合

白く葩厚く... 卷丹

取得て袂... 黒点あり山丹

狂... 花赤く六弁

秀瓜... 鬼百合の花教









葵 花の大きき錢の大きき花より  
白赤二種あり開きそ久し

龍葵 莖葉のついで似  
て実ハ茄子に似  
似より其始青く熟する時黒  
く或ハ熟して赤き物也龍珠といふ人

萱州花  忘憂草  
黄赤百合に似たり住吉の景物  
なり 夫木 為相

下細はけきくまのなごう  
ころろふらまね人のおれり也

排 忘憂の花を暑に花れぬ 荷令  
萱州の花とみや思はるる来山

詩 萱州之詞 唐 李咸用

芳州比君子 詩経ニ 詩人  
見へたり 祇應憐雅態

情有由 是ハヨシ  
アルコト 花葉ノ風流温雅

味必解 忘憂 ナルヲ愛シテ長ク

忘ルト云コトハ解 積雨 涼庭小  
スルニハオヨバヌク

微風 鮮 雨ニキニテ涼草  
レダリハハ風ソヨキ

柔潤ナリ 莫言 開太晚猶  
テコケモ 菊ハ秋ノ末ニヒラク

勝菊花 秋 菊ハ秋ノ末ニヒラク  
ツレカラ見レバ 早シトナリ

下毛花 繡線箱 葉に似て小き  
花をのうく 淡赤色あり

金蓋草 花黄之白  
金銀花 花紅み 金銀

花 忍冬の花之黄白  
交咲く故ニ名つく

排 金銀花れればあく  
たふしし地を利貞 夏菊

種類中 逸異名秋菊の一時あり  
連 夏菊の伝念をいふ葉の祥 宗節

種類中 逸異名秋菊の一時あり  
連 夏菊の伝念をいふ葉の祥 宗節



茴香

色薄黄



時計草



花日の内ふつとくしからる  
是ふよつて時計の名なり

威靈仙

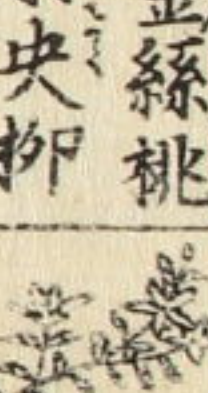
花淡紫

鼠李

馬栗子

美容柳

金線桃



花黄

治積痞法

九州大祿の諸士

平素積を憂ふ死ふ至り其  
子小遺をくして死せば腹をさ  
き積と見て何もの相とさす  
是を見よと命を子遺金と  
だがかく上は訃へ腹をさく  
果して積塊あり甚どか  
利刀とくく刺くわの種  
種の菜物を以てとげ共々の  
変せど其中一人楊枝をすめて  
飯初よさ其マしたちふと  
ふ是びや柳を作る楊枝

故右柳の葉を煎してをぎ  
く其積塊ならち消滅と云り

酢漿草花

一名酸母。片葉三ツ  
ある故か

蛇牀子

異名 増藤。蛇末。蛇粟  
。馬牀。花白く積

其実を食ふゆへ名つと

蕺菜花

異名 蕺菜。魚腥草  
花四葉以て白葉鮮

草石蠶

異名 甘露子。土  
。滴露。地瓜。五月

根と堀り蒸し煮て喰ふ味  
百合のこく根老蠶のじ故名なり

菘菜花

名びつと。な  
。本草綱目云其莖

蔓ふ似て強く刺あり葉馬の蹄  
のぶとく光沢あり秋黄なる

花をひくくとく。俳借の季  
この古来より夏とする故爰は出す







あやせもつらみりるのほ

草庵 水辺菖蒲 頃阿

きよみちのふりつらみりるのほをひて  
あやせをよける庭の池あり

○江師菖蒲を献せしむ 狀よ  
進上水邊菖蒲

千年五月五日大江野哉

皆人よと得はりと師頼御よ  
まねたりとを

詞はあ池のあやせの風かほる。

みどりすじくまをりあへい

子とせ年たふそくしあやせの

根をきふそくしあやせの

の根をきふそくしあやせの

小冊 蓋田池 露草 生也

△高蒲つゝのほくろのこ

連かり枕せけいふあやせの牡丹花

入まふ小家もいふあやせの 紹巴

○俳 座月もうたけりあやせの十ナ

いむあやせの機もあやせの風も其角

狂 皆人のこころふよしのれあやめ

候 候はる水さのけい常葉

あいの葉は根もあやせのこころ

あやせの風の葉もあやせの夢れ

朝露草 銀錢花をる者小似  
て白青うりこあり

底黒紅のこころあり 葉三出五出

あり西瓜の葉小似より 高さ

二尺そより枝あり 朝

ひるきゆふはまたあやせ

長根草 江蒲草の石籠草

穂のこころ 蚊帳釣草 草

小花より

木の類よりがまの葉に似て其  
くさくさあり花薄あかり

萍花 崩出の春より 為家



又さしにほくやまのん山深乃  
傍りも出る中川のぬ

⑤ 藤花 藤花  
あられ家々咲こ由 藤花

水蘊 水蘊 △藻とわら 水蘊 舟  
夫木 貫之

⑥ 蓮 蓮  
あつた今日とて言ふて花を  
あつたてふくまをくぐらん

⑦ 鉄線花 鉄線花  
池を石をいふ面あつた 鉄線花

⑧ 鉄線花 鉄線花  
二月苗宿根より生じ  
四五月花咲くありはる

⑨ 鉄線花之詞 鉄線花之詞  
賈昌期

⑩ 披雲似有凌雲 披雲似有凌雲  
志 サキ出タル

⑪ 向日寧魚捧日 向日寧魚捧日  
見ヘルス

⑫ 心 心  
ウヤマフテノ心テアラウ 珍重上月

松好依 松好依  
ツルクサナレハヒトリク  
ルヲアタワズ松ノ木ニイ

カ、リ カ、リ  
直從平地起 直從平地起  
タルク タルク

⑬ 撫子 撫子  
瞿麥 瞿麥  
大花蘭 大花蘭

⑭ 品 品  
今分て二種 今分て二種  
花 花

⑮ 薄紅 薄紅  
倭撫子 倭撫子  
葉 葉

⑯ 紫 紫  
阿蘭陀石竹 阿蘭陀石竹  
葉 葉

⑰ 紫 紫  
阿蘭陀石竹 阿蘭陀石竹  
葉 葉

⑱ 紫 紫  
阿蘭陀石竹 阿蘭陀石竹  
葉 葉

⑲ 紫 紫  
阿蘭陀石竹 阿蘭陀石竹  
葉 葉

⑳ 紫 紫  
阿蘭陀石竹 阿蘭陀石竹  
葉 葉







狂かきつるを河へ入るは新山の  
あはれなる人よるは此のよる行風  
叶ふまう長尾引くまは此の  
鼻くはくはるるおほゆ 全

詩 瞿麥之詞

唐 司空曙

一自幽山別相逢此寺中

一ハカタ幽山ニテ見テカラニタカク  
此寺デオホクノ花ヲ見ルツ 高低

俱出葉深淺不分叢

ト野蝶難争白庭榴暗讓

紅白キ花紅ノ花外ノモ 誰憐芳

草色春露到秋風 花ノウツク  
レキテ葉見

スルコトバナリ

田植 早苗取。苗の長七八  
寸の時うづ植と云ふ又

早苗と云ふはうづつるもつゝ  
能合羽着て衣とあるも田舎 其角

早乙女 女の苗を植ふ云(能)早乙女  
のよくれぬ教は朝み其角

田歌 苗と云ふの時声であけ歌派よ  
連声の色も美苗と云ふ田舎の  
梅のいはり里井門さへ田舎か 紀伊

(能)早乙女のよくれぬ 郊云 梅侯

田草取 苗と云へて十四五日た  
かりと云ふは上よりい

見えさしれども草の根土中よまび  
らけり早く芸ふはとていふ

とくささだまの草の根こびり  
苗と云ふは十四五日たて草と

て其後ヤクと云ふ草と云ふて  
報鋤しつゝの季は六月と云

新撰六帖 知家

若苗△玉苗△初苗△  
早苗 △若苗△玉苗△初苗△

四月と云五月と云は苗と云ふの午  
日程と云九寸と云一尺と云成ると云



奇 夫木

人丸

あどよりハハ面の小田ふせねれて  
は苗若のらま面とくつしり

家集 取早苗圃郭公 西行

やぐさ守吉ゆ極女のそよよれて  
山田のらまへへもしてりとする

兼久五十首 早苗多 定家

うへうすみふりのらまへ里じり  
ぬこみらそま家のたももるなり

夫木 株早苗 為家

とよもふふらうとよもふふらう  
とよのらまへとよもふふらう

寛元奇合 社邊早苗 知家

たのらまへたふらうとよもふふらう  
おくりのらまへとよもふふらう

建保奇合 夕早苗 範宗

とよもふふらうとよもふふらう  
とよもふふらうとよもふふらう

家集 雨後早苗 仲正

とよもふふらうとよもふふらう  
とよもふふらうとよもふふらう

常盤井百首 門田早苗 仲正

かきくもるふらうとよもふふらう  
りいてのらまへとよもふふらう

詞 裾井小田 志光 龍 ぬまそ 入神

小山田 懐 三 死 多 谷川 里 多 死  
志光とて きのふもくま ぞんへる水

ふ町田 懐 の 男 六月 取 青田

運 早苗 ともふらうとよもふふらう 宗祇  
とよもふふらうとよもふふらう 宗春

能 ともふふらうとよもふふらう 芭蕉

狂 ともふふらうとよもふふらう 十人  
狂 ともふふらうとよもふふらう 宗恒

六月 菱花の 勇 委

若竹 今 年 竹 新 竹  
竹 笛 竹 諸 草 の 内

長 高 竹 故 多 計 名 づ く 又  
此 君 云 夫 木

批 君 頼 朝 今 竹 竹 竹  
今 代 の ち だ 今 竹 竹

今 代 の ち だ 今 竹 竹



連花さく竹ふもつしあ糸小宗祇

非美竹や鞍小ワわろお板山其角

美竹や雪のまきまきまきまき

美竹のうくまきたる雀る道洞

○竹をさゆの竹解日小かきうさす

正月朔日二月二日十二月十二日小

うゆべー雨後うゆ色活一安一

○信濃小竹をーあれり篠竹の

るり正月小松をり 篔簹竹

立て竹いかざす

細長く節ひそくして 業平行

直たり矢竹小用ゆ

雄竹の如く節の雌竹小似り

女竹男竹の見分るさゆ業平行

観音竹 葉短くは 志多竹

かま竹 布袋竹 太さか竹

如く 竹は皮散

竹の作り 竹は皮散

用ひきききき竹の皮はるん

六月の季とす竹の皮はるん

艾 異名 冰臺 黄草 豨草

白蒿 △艾刈。ちを死と

をかりはてし季なり

○此の中は差たりして 時頼

俗蓬の字を書く蓬ハ物名

種類多し千年艾らとす

草花蒿。白蒿。角蒿等あり

直菰刈 異名 艾草 蔣草

○古代俵み作る今縮蒿を以て

作る物をさむくし小具はるん

真の艾の詞より死こもといふ

○今らまきとすくいのさう。○奥

州ふむり昔豊浦をー端平小

これを軒小甚目とす

古今 貫之

美菰る度のはあ雨はまきこ



はひよりいへばまきりけり  
能 初日教まはるいあはるい半素

石菖 能 名高のゆめ  
台 白水の形 移竹

和布刈 正字石菖 紀州  
加田より出るといふ

の類なり 海帶刈  
の類なり

ふりやうの類なり 名づく  
ふりやうの類なり

李子 異嘉慶子 明李 乘 寓  
居陵 沈朱實

詩 李之詞 唐 李峤

潘岳間居日 潘岳字安仁 此故事 文選

代ノ人 王戎 戲 陌 辰  
王戎が 事下ノ

故事 蝶遊 芳徑 馥  
芳徑の花

枝ノ葉暗 青房 晚  
青房ハフ

ノ実コノトキ葉々 花明 玉井 春  
シゲリマスナリ

李花ハスルテ 鮮明  
シテ 徹ルナリ

幹 李樹ノミキニハ神  
時ノキハメテアリ

人 ソレニハ李ヲ神仙  
人ニタトヘタリ

李 晋ノ王戎七歳ノ時  
諸ノ小兒ト道傍ノ

李ノ樹ノ下ニテ 遊フ  
李子ノ多

キヲ見テ枝ヲ折ル 小兒競ニ支リ

我先ニト拾ヒ取ル中 ニ王戎ハカリ

取ラントモセス人ツ ノ故ヲ問フ  
王戎

ガ云ク路傍ニアル李 ニテ人モ取

ズシテ然モ子ノ多ナル ハ必ズ苦キ

李ニテアラン此故ニ我 ハ取ラズト

答フ果シテツノ李 苦クシテ

モ食レザリシト 龍血  
李ノ肉

世説ニ見ヘタリ 李ノ肉  
厚フシ

テ後ノナキハ龍ノ耳ヲ割ル 其血ノ落タル所ニ李ヲ生スルト



鑽核

王公豐好李ノ木ヲ持テ價貴ク賣ル

他人ツノ種ヲ植ニ事ヲオツレテコトククツノ核ヲ鑽タリトス

李接法 桃木小とくくの枝と

はちを突くればぬみであはし

楊梅 (異名) 杙子 聖僧やまり

紅白紫の三種あり泉

州大義又生どりの尤佳なり

能中ぬみかちる高は経のよ承我

冬花採盧橘 冬ハ橘ノ実ヲ花ニタトヘテトリシヅ

夏菓摘楊梅 夏ハコノヤモニシク物ナキニツテツミトルナリ

詩 全七字對句 詩礎

樓閣兩山搖碧落 嬌暮春

楊梅千礪瀉紅泉 一庭花

高林帶雨楊梅熟 故園春

山岸籠雲謝豹啼 帶雨閑

詩 楊梅之詞 唐 李嶠

折來鶴頂紅 猶濕 揚梅ハヨク冥雀ノ

丹頂ニ似タリ 剋破龍睛血 味乾 神

ノヒトミニモ 若使太真知 此

味 揚貴妃ガ此揚梅ノ 荔枝馬

得到長安 荔枝ハ長安ノミヤコニ到着スル事ハアルニシ

荔枝揚梅ヨク似タリ ヤモモヲ茶言テ 詩ニ云ナリ

氣條挑 ぬくのうれ身を振ふ

魚花果 映日葉 優曇曇花

初青く熟るとは紫黒色味甘

淡し〇涅槃經ニ云く佛出世



鳥曇花の喩へて稀なる事

以て即ちの無花葉の事あり一

千年の一度花を開くと云

ハ安誕なり ⑤ 玉椿光とみかく

君々代は百回く咲

優曇花を花乃とも

和州山中ふり花をくして実

をひきよ枇杷を似て小ざう小

児好ん 枇杷 非飢この花より

で食ふ 枇杷 枇杷のこも

光廣卿 毒虫小刺まぐる治法

刺まていともまのびのびの

枇杷の核を甜くてこれを

はくまをいとも頻み治す

詩 枇杷五字對句

楊柳枝々弱 媚々翠海風

枇杷樹々香濛々綠枝香

詩 全七字對句 詩礎

回看桃李都無色 對春溪

喚得芙蓉不是花 正滿林

万里青障蜀門口 味尚酸

千樹紅花山頂頭 溪水流

青梅

青梅の葉分まわけのいつたか結巴

非 嬌さいななれ梅のいつくる社園

狂 喜梅をよもむてふはむらむら

くらひんめりしむらむらうら

詩 青梅之詞

天賜胭脂一抹腮 胭脂ハ紅

ナハ盤中磊落笛中哀 落梅

イフ笛ノ 雖然未得和羹便

曲アリ



五月 草木 羅隱

鹽毒和羹ノコト 曾興將軍止

書經ニ見ヘタリ 渴来 ナリ將軍ハ昔操ノコト

ライ 羅隱

李子 甜梅。り。梅ふ。酸。根の。置

て。り。い。れ。が。実。多。一

櫻桃 紅色。と。朱櫻。と。紫色。と。細黄点。あり。の。と。紫櫻。と。

名。く。味。尤。美。黄。と。と。蠟。櫻。と。の。薄。紅。を。櫻。珠。と。名。づく。

○中夏天子は含桃を食ひて。事あり礼記に出る。含桃ハゆき。ひらのことなり。

詩 櫻桃之詞 王維

勅賜百官櫻桃

芙蓉閣下會千官 御殿ニ官人ヲ集メ

會宴アリ紫禁朱桃出上蘭庭

ニテ櫻桃纔是寢園春薦後

ヲ賜フグ 春薦先祖ヲ非關 衞苑鳥啣

殘 春華ノヒモロギニテ 衞苑鳥ノツキニ三六

帶青絲籠 退出ノキ 并領セン

中使頻傾赤玉盤 ンレクニツク

飽食不須愁 内熱 ンレクニツク

大官還 有 蔗漿寒 位

桑實 正字 青小柚 音く

薑 在 新撰大食法云々此は

生胡桃 新撰大食法云々此は

早松茸 五月

光俊 出るを



つ四五雨後生ると早初云  
能風養のや花は早稲草風花并

加子 異名 崑崙瓜 草薺甲  
俗語 小秋茄子 嫁小くい

さるこつふいひいあへまうい  
いはさへ一幸こや万葉集  
の中いこつり

初茄子 異名 新茄子 細糸茄子  
水茄子 早く出さ月の人

瓜花 甜瓜 越瓜 瓠瓜 浅  
瓜 胡瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜

浅瓜 白瓜 干瓜 青瓜  
夫木 定頼

瓜花 甜瓜 越瓜 瓠瓜 浅  
瓜 胡瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜

瓜花 甜瓜 越瓜 瓠瓜 浅  
瓜 胡瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜

瓜花 甜瓜 越瓜 瓠瓜 浅  
瓜 胡瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜

瓜花 甜瓜 越瓜 瓠瓜 浅  
瓜 胡瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜

瓜花 甜瓜 越瓜 瓠瓜 浅  
瓜 胡瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜

瓜花 甜瓜 越瓜 瓠瓜 浅  
瓜 胡瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜

瓜花 甜瓜 越瓜 瓠瓜 浅  
瓜 胡瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜

瓜花 甜瓜 越瓜 瓠瓜 浅  
瓜 胡瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜

瓜花 甜瓜 越瓜 瓠瓜 浅  
瓜 胡瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜

瓜花 甜瓜 越瓜 瓠瓜 浅  
瓜 胡瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜

瓜花 甜瓜 越瓜 瓠瓜 浅  
瓜 胡瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜

瓜花 甜瓜 越瓜 瓠瓜 浅  
瓜 胡瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜















はらみく拾芥小有す とせうりい秋あり 鶉うぐいすの

巢うぐいすのうら 蛆うぐいす うぐいすのうら

初蟬 △蟬の初声。此ころ早くかきこえる

能知夜や笛ふ代名 蟬 △空蟬を十文字其角

蟬五徳あり 頭ふ 髪あり 文人 露の の い 瀟々 時節 と た 人と

鳴い 信ん 黍稷 を 享さ ず い 廉ん 子の 所巢 穴も と も ぞ い 儉あり

新古今 根政大政大臣

秋ら け れ 氣文 の あ り 蟬 の 乃 海の 東や 下葉 子い 人ん

夫木 俊賀法師

夕け の き の 林 ち く せ み の あ り も け れ せ る け ら ぬ る

龜山殿七首 樹陰蟬 有光朝臣

そ ふ け る 本陰 小あ ぐ せ せ の け ら ぬ る け ら ぬ る け ら ぬ る

詞 吟 声 す け る 後 声 林 あ り す け る

あ ら け る 耳 は け る も も 夏 山 蟬 の

羽衣 声 たり 積 雲 空 人 あ り け け る

松風 の 声 は け る 羽 衣 け け け る 去 れ

引 け け る 風 は け る 雨 あ り け け る

ま ち け る 雲 の 林 あ り 夕 日 相 け け け る

運 を 坂 の 下 け け る 子 あ り け け る

能 隣 け け け る 蟬 の 角 あ り

狂 帆 板 け け け る 帆 板 け け け る

心 の こ も 人 は 蟬 が け け け る 春 房

詩 蟬 五字 對句

同上

客 吟 孤 嶠 月 盤 雲 雙 雀 下

蟬 噪 數 枝 風 隔 水 一 蟬 鳴

詩 蟬 七字 對句 詩 變

數 家 茅 屋 清 溪 上 有 蟬 聲

千 樹 蟬 聲 落 日 中 夕 陽 中



垂緜飲清露 セミハツユノ 流 ニテソタツ

響出疎桐 キヨキ声ノ樹 居高 キヨキ聲ノ樹

聲自遠 名キ本ニ居テチ 非是 ハトラクキコハク

藉秋風 コレ風ノフクフカ 又ニハヨラヌガ

故 齊女化 齊王の后王を怨

化して蟬とさり 樹に登りて鳴く

ゆへに蟬を齊女といふなり

深の朱异通 事舎人とも

後中書即ふ除やうく時亦飛

蟬有て昇冠上へ集り蟬の北を

鼓虫 小き黒こゆへ水とせ

小鱒 鱒の小こ 細虫 形小き

水馬 鱒虫ニ飼賣とも云池川

赤色み地 輕節と似たり 一説 味其く 飴の如くともいふなり

蟪蛄 小こ事なるとん方かこ虫 とつり故 蚊の睫不集り

居る 蛇脱皮 髪生妙方

餽飽の粉を水とて移りこし膏

菜とのへるとく 蛇の衣をよけやの

廣さ小切り 右のうへに粉ふれを

付元より所をれば髪まらる事妙也

必用 此部より五月一ヶ月 要用の事とあるも

破	夜五ツ	夜四ツ	夜九ツ
軍	午ノ方	未ノ方	申ノ方
向	酉ノ方	戌ノ方	朝六ツ
方	子ノ方	丑ノ方	寅ノ方
	辰ノ方	巳ノ方	暮六ツ

日 亥 用ゆべり月建方







五月 必用

又法 枇杷の核を細末とす

又法 梅の葉を煎じて洗ひて

青梅枝葉ともふえり貯るる法

青梅の枝折を葉も実も葉も

とろろく巻めて別な梅と皮む

さて水は漬し醋と出し其醋

一外に寒の水一外に合和して

漬して入用の時より出し水

以て生るべし葉も実もかりどし

青梅をとり皮とくろり核と去り

かごに入火上おけり置いて後にもあ

用也 年中青梅と貯る法 青竹

を二つ小割り青梅と入し其の如

く合せ葉もとろり其上を山土

かて塗りその地を堀りて埋め置

べし 来年もその損せりて持つ

用る時竹を引とり入用やく取

りの如く埋め置べし

### 五月飲食料理献立

好温暖の物を食ふべし此月  
物腹中却て冷物もわががけ  
禁 冷物及び生瓜蜂蜜を忌む  
物 〇びくと焼者一時小食ふべし  
谷川の停水を飲べし魚鱈  
のよれ水はあり是のよれ魚鱈

料 汁 小豆 芋 人参 豆腐 竹の子 丸い豆 とうもろこし たくまき

た けり 牛房 清汁 ちさ かいりりる

塩 いたり 鱈 赤貝 白うなぎ

まま せう かり ちん ちん ちん ちん

差味 松菜 ありの ありの ありの

煮物 ときき切身 ひきり 竹の子 けり けり



五月 飲食

吸物 たつぎ

和 青き花

會物 たつぎ

進汁 みるび志せ

精汁 みるび志せ

清汁 みるび志せ

膳 みるび志せ

差味 みるび志せ

煮物 みるび志せ

和會物 みるび志せ

吸物の

牛房小品  
かひごぢ  
えいせい  
とあむ  
うど  
かひごぢ  
えいせい  
とあむ  
うど

五月用意の品

臨生薑法 竈の前の土とく  
堀と底とあわぬりこしき其  
土は生薑を置き土とあわ  
てより久しをたくらうしん

生薑貯法 生薑を桶に入らし  
そ河瀬のまき所を埋つ先  
石で重し其のけ置へしつ追も  
生まで能くしめりしうし草子  
の取貯へやうし右も同一

薑塩漬法 薑をよれ  
ゆふさぎさぎよく水気を去りて  
梅酢又漬へし漬ると乾茶と  
少く緋切はけき底へ入し置  
べしかくのしんしん一年を経



魚王子塩法

極暑の時魚を三枚はかり大  
鉢に水一盃入置きて塩を入る  
る其後玉子を入れて見ると  
玉子沈むるなり又塩を入る  
かあるよりいよいよ玉子より物々

このかけんにて魚よくたまり  
物也 **梅酒の方** 古酒 一斗 梅 五

砂糖 心次 右梅少くも疵のなきを  
見て花のこけをと 飯粒として

一夜灰汁を漬洗ひ水氣をぬぎ  
酒へ入るなり **飯の饅法**

苺の葉と飯の上をかき一夜  
を経てもよくと

**貯る法** 鯉の粉をまひて  
其中小魚をばみ油を入れ置

損を事あり **又方** 寒  
中の雪水まひておひく久し

く損せず







寄  
解  
改正月令博覽  
三